

# 草庵仏教

第133号  
(発行日)  
2001年7月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638126 西宮市  
小松北町1-2-3  
電話・FAX (0798)  
41-5346  
(発行人) 土井紀明  
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp  
http://members.tripod.co.jp/souan211

## 《 聞法会ご案内 》

- \* 同朋の会 (念佛寺)  
22日午後2時  
.....
- \* 聖典講座(浜屋西宮店)  
第1土曜日午後3時
- \* 念仏座談会(念佛寺)  
第3土曜日午後3時

## 仏におまかせとは

覚を取らじ

**M**「真宗のお話を聞いてみると、しばしば(仏様におまかせする)というのを聞きますが……」

**D**「ええ、真宗の信心を語る場合に、(仏様におまかせする)とよく言います」

**M**「その場合、仏様とはどなたですか」

**D**「阿弥陀仏のことです」

**M**「阿弥陀様におまかせします」というのは阿弥陀様への押しつけではないですか」

**D**「阿弥陀仏は先手をかけて、私たちに(我にをまかせよ)と仰せられているのです」

**M**「それはどこにいわれていますか」

**D**「(阿弥陀仏にまかせよ)といわれてくる源は、大無量寿經に説かれている第十八願の思し召しです。この願を善導大師は

《若我成仏十方衆生 称我名号

下至十声 若不生者不取正覚》と理解されてから、(弥陀にまかせよ)のいわれとして伝統されてきたといえますよ」

**M**「この言葉に(仏にまかせよ)のお心がこもっているのですね。このご文を説明してください」

**D**「このご文は

《もし我成仏せんに、十方の衆生我が名号を称せん、下、十声に至るまで、もし生まれずは正

と読み下され、我が名(南無阿

弥陀仏)を称えるものを浄土に

必ず生まれしめん、という阿弥

陀仏の誓いを表しています」

**M**「この言葉が、私の全分をまかせよという意味(仰せ)になるのですか」

**D**「私はそのようにいただいています」

**M**「なぜですか」

**D**「まず、(我が名を称えよ)のお心は、私の無明・煩惱という

悪の全体をさわりなく受け取り、仏たらしめようとお誓いします。そして(必ず浄土に生まれさせ

る)というの、私の(死・死後)を引き受け、浄土に生まれしめてくださる誓いです」

**M**「なぜ、それが私のすべてを引き受けてくださることになるのですか」

**D**「私の全体は身体と精神で成

り立っているといえますよ」  
**M**「普通、からだところの全体を私と言ってますね」

**D**「私の身体は死にとり囲まれています。経典にしばしば(小水の魚のごとし)とたとえられているように、水たまりの中の水がだんだん干上がっていくにつれて、水の中の稚魚のいのも追いつめられて、やがて干上

がってしまいます。私の何ものによっても死を回避することは出来ません。道徳も経済も科学も芸術もできません」

**M**「身体が死によって限界づけられているのですね。では心はどうでしょうか」

**D**「私の心は全体が無明煩惱(罪)で覆われています。教え

によって私の心の深部が知らされてくると、私の心は親鸞聖人が

(凡夫というは、無明・煩惱われらがみにみちみて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむところおおく、ひまなくして)と仰せられるとおりの心です」

**M**「われらの心の本質は無明・煩惱であるといわれるのですね」

**D**「そう伺います。しかも私たちは煩惱だらけの我が心を自分の力で改変も処理もできない。それゆえに困っているのが私たちのいつわらざる有様です」

**M**「自分の心に自分が困っているといわれるのですか」

**D**「ええそうです。欲しい物が得られないで苦しんでいるように、実際は欲しい心に困らされている。あの人が憎いと思つて

夜も寝られない時、実際に自分を苦しめているのはどうしようもなく湧いてくる憎しみの心でありましょう。孤独で困るとい

うも、実際は孤独を感じてしまいう心に困っている。他者にやさしくありたいと思つても、自分

の冷たい心につかれます。それらはみな煩惱として、それこそ読んで字の如く、私を煩悩ませます。その一番身近な自分の心をより善く変えることは甚だ困難です。いわば私の心は無明・煩惱に限界づけられています」

**M**「無明というのは何ですか」

**D**「煩惱が起る根本の原因です。それは真理に明るく無い、いわば真実をさならない迷いのことです。そこから一切の煩惱が起るのです」

**M**「身体としての私は死のなかに呑みこまれていき、心としての私は無明・煩惱に覆われている。いわば私の全体が死と罪に縛られているのですね」

**D**「ええそうです。それゆえに私自身はすでに本質的全体的に破綻しているといえますよ。善導大師はそういう身を

『自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、広劫よりこのかた、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし』(往生礼讃)

(わが身は今このように罪深い迷いの凡夫であり、はかり知れない昔からいつも迷い続けて、これから後も迷いの世界を離れる手がかりがない)

と申されました。つまり私どもは罪悪の深い凡夫であり、生まれ変わり死に変わり流転して止まず、しかもその自分をどうすることも出来ない無力な人間、

と仰せられています」

**M** 「罪悪深重の凡夫であって、しかもそれをどうすることもできないのですね。そういうえば、キリスト教で最も偉大な伝道者といわれているパウロが、自分のことを告白して、

「わたしはなんといいみじめな人間なのだ。だが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ロマ書七の二四)と言っていますが、よく似てますね」

**D** 「そうですね。(死のからだ)といえ、聖人も自力の凡夫の有様を(逆(ぎやく)謗(ぼう)の屍骸(しかい))と言われている」

**M** 「逆謗(ぎやく)というのは何ですか」

**D** 「要するに重大な倫理的宗教的な罪のことで。ですから逆謗(ぎやく)の屍骸(しかい)というのは(罪深いしかばね)ということでしょう」

**M** 「生ける屍(しかばね)のような存在、それが私たちの姿なのですね」

**D** 「(生ける屍)という言葉の通り、生きているが中身にまことがない空虚な人間なのです」

**M** 「空虚な人間だから人生が空しく終わってしまうのですね」

**D** 「しかも、そういう人間にもかわらず、いろいろな課題や義務や責任を負(お)って、疲れはているのです」

**M** 「中身が空虚でありつつ、たくさん(お)の重荷を負うて生きていくのですね」



道祖神  
(C)SHOGAKUKAN INC.

**D** 「真面目に人生を生きようとするほど、負いきれないほどの義務や責任を感じざるをえません。大谷派の先覚者清沢満之師はこの問題に非常に苦しみました。師の絶筆(我が信念)には次のような告白をしております。

「言葉をつつしまねばならぬ。行いを正しくせねばならぬ。法律を犯してはならぬ。道徳を破りてはならぬ。礼儀(れいぎ)にたごうてはならぬ。作法を乱してはならぬ。自己に対する義務、他人に対する義務、家庭における義務、社会における義務、親にたいする義務、君にたいする義務、夫にたいする義務、妻にたいする義務、兄弟にたいする義務、朋友(ほうゆう)にたいする義務、善人にたいする義務、悪人にたいする義務、長者にたいする義務、幼者にたいする義務、いわゆる人倫道德の教えよりいづる所の義務のみにも、これを実行することは決して容易なことでない。もし真面目にこれを遂行せんとせば、ついに『不可能』の嘆きに帰するより外なきことである。私はこの『不可能』につき当たりて、非常なる苦しみをいたしました。

もしこのごとき『不可能』のことのためにどこまでも苦しまねばならぬならば、私はとつと自殺もとげたでありますよう」と言っています」

**M** 「私たちはふだん何となく生きていますから、こうした問題に苦しむことは少ないのですが、実際、真面目に人生を生きようとしたら必ずこうした問題にぶつかりますね」

**D** 「ええそうです。私たちは、こうした多くの重たい荷物を背負い、しかも死への一人旅をしている煩惱だらけの空虚な人間なのです」

**M** 「では、結論を急ぎますが、こういう私たちに阿弥陀仏がいたらきかけてくださるのですか」

**D** 「ええそうです。そういう凡夫に阿弥陀仏は(もし我成仏せんに、十方の衆生我が名号を称せん、下、十声に至るまで、もし生まれずは正覚を取らじ)と誓いたもうのです。いわゆる(我が名を称えよ)との仰せであります」

**M** 「その言葉で阿弥陀仏は何を私どもに言おうとされるのですか」

**D** 「私どもの罪悪の一切を引き受けて浄化する(仏に成す)ことを誓い、死にゆく私たちを浄土へ生まれさせることを誓いたもうのです」

**M** 「ということは、私の罪悪と死・死後を完全に救いたまい、

仏陀たらしめてくださるのでですね」

**D** 「ええそうです。私の死と罪を引き受けてくださる、もう一つ言えば私の身心あげての全分山のような課題や責任も含めてのお引き受けなのです」

**M** 「人生生活上の義務も責任も含めて、私の全存在をにないたもうのですね」

**D** 「ええそうです。この点について先ほどの清沢師は、自殺するほかないという(ご自身に(無限大悲の如来は、如何にして、私にこの平安を得しめたまふか。外ではない、一切の責任を引き受けて下さることによる)りて、私を救済したまふことである)」

と、如来の大悲を讃仰しておられます」

**M** 「すぐく思い切った言葉ですが、でも大変有難い言葉です」

**D** 「軽く聞くと誤解されかねない言葉ですが、しかし、人間は最後この言葉で救われるのではないかとさえ実感します」

**M** 「ただ、仏様にすべてをおまかせする、というように聞くと、(それは無責任というものを、返ってきます)だらしなく、(倫理道德をかる)んじることにならないか」という疑問が湧きますが、この点はどうなんでしょうか」

**D** 「阿弥陀仏におまかせするということは、阿弥陀仏が引き受

けてくださることだと、さきほど申しました。

阿弥陀仏は引き受けた私たちをこの世で真に生かそうとされまします。それは死人のごとき重病を引き受けて治療し、社会で働けるようにする病院と似ています。ですから仏におまかせした人は、阿弥陀仏によって生き返り、真に生きる力が恵まれてきます」

**M** 「阿弥陀仏はすでに破綻(はたん)している人間を、再度生かそうとされるのですね」

**D** 「そうです。その生き方は人それぞれ個性や業によって違いはありますけど。阿弥陀仏のお力(ちから)がその人を動かしていくのではないのでしょうか。もちろん、私どもは業が深いですから、阿弥陀仏のお力の表れる邪魔をしなければなりません」

**M** 「分かりました。(引き受ける)というのは生き直させるという意味ももっているのですね」

(了)

### 【電話相談室】

(秘密厳守・匿名可・無料)

(時間)

午前8時より午後10時まで

(電話)

0798-41-5346

(相談内容)

人生上のいろいろな悩み・相談

信仰上の相談・仏事の相談

\*相談員が留守の時がありま

すので予めご承知ください。

# 歎異鈔 第十章第二講

「念仏には無義をもつて義とす。不可  
称不可説不可思議のゆえに、とおおせ  
そうらいき」 (歎異鈔第十章)

現代語訳(本願他力の念仏においては、  
自力のはからいがまじわらないことを根  
本の法義とします。なぜなら、念仏はは  
からいを超えており、たたえ尽くすこと  
も、説きつくすことも、心で思いはかる  
こともできないからですと、聖人は仰せ  
になりました)

弥陀の本願は、念仏往生の願といわれ  
ています。法蔵菩薩は一切衆生を平等に  
仏たらしめんがために、長きご思案を尽  
くして念仏往生の願を建てられ、この願  
を成就して阿弥陀仏となられ、この願の  
通りに働いておられると、お聞かせをい  
ただいています。

念仏往生の願とは

「もし我成仏せんに、十方の衆生、我が  
名号を称せん、下、十声に至るまで、も  
し生まれずは正覚を取らじ」(往生礼讃)  
という弥陀の誓いです。親鸞聖人もお弟  
子の有阿弥陀仏へのお手紙の中に  
「弥陀の本願ともうすは、名号をとなえ  
んものをば極楽へむかえんとちかわせた  
まいたる」

とお示しになっています。ですから念仏  
の本願は極めて単純です。「我が名を称え  
るものを助ける」という仰せです。

ですから歎異鈔第二章に、善き人法然  
聖人から

「ただ念仏して弥陀に助けられよ」

と聞かれて

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀に  
たすけられまいらすべしと、善き人の仰  
せをかぶりて信ずるほかに別の子細なき  
なり」

と親鸞聖人は申されたのです。この外に  
申し上げることは何も無い、とまで仰せ  
られるのです。これはまさに「念仏は無  
義をもつて義とす」る姿ではありません  
か。

ただ称え

ただ信じ

ただタノミ

ただ聞く

これらはすべてただ一つのことです。  
「ただ」というところに無義の姿があり  
ます。

私の考えがどのようなであろうとも、私  
の思いが何を思おうと、また他者が何と  
言おうと、世間がどういふ思想や教えを  
宣伝しようとも、(必ず汝を助ける)とい  
う弥陀の仰せをマコトと信じているので  
す。こう申しますと、何か堅く信じ込ん  
で、絶対に他者の話には耳をかさぬとい  
った頑固な信心に聞こえますが、まったく  
そうではないのです。己の信心を壊さ  
れまいとして、堅くガードする必要はあ  
りません。何の用意も何の構えもないの  
であります。私の心に響いてくる仰せを  
仰せのままに受け入れていただけなので  
す。弥陀の本願をまことと聞いているだ  
けなのであります。

それでもなかなか本願を信受できない  
のは、自分の見解を主張するからです。  
これは、(自分の考え)に自信があるから  
です。

多くの真宗の聞法者が、長年真宗の教  
えを聞いていても信心がいただけのない  
は、実は(自分の見解や考え)をたのみ  
にし、自分の思案を役立てようとするか  
らです。

戦後の教育は、個人の尊重、個性の尊  
重ということが尊ばれてきました。そこ  
で、個人の意見を大事にし、一人一人が  
「どう思うか」「どう考えるか」「どう感  
じているか」が強調されてきました。そ  
して私たち自身も自分の考えや思いを大  
事にするのを当然とするようになって  
います。

政治や経済上、また人間関係や学問の  
論議などの世間の場では、個人の意見の  
尊重ということはとても大事なことです。  
しかし、永遠の真実にあうという道  
においては、私個人の考えや思いを大事  
にしすぎることは、道において足踏み状  
態が続くことにはしばしばなります。

自分の頭に浮かぶ考えにこだわりなが  
ら、經典の言葉や真宗の教えを聞く時、「仏  
教ではそういう私が私はその思わない」と  
か「お釈迦さんはそう言われるかも知れ  
ないが、私にはそう思えない」とか「親  
鸞さんはそう言われるけれども、私はこ  
う考える」というようなところに長く留  
まってしまふ場合がずいぶんあります。

もちろん聞法し始めの頃はそれもいい  
と思います。けれども、そういう姿勢で  
の聞法では自分の考えや思いや私の思案  
の枠組みから出ることが出来ません。な  
ぜでしょうか。

私は、そこには「自分の知性にたいす  
る信頼」があつて、それを元に仏説を聞  
いているからだと思ひます。いわば傲慢  
心があるのではないのでしょうか。

ですから釈迦如来は無量寿経に「謙敬  
にして聞き」と仰せられています。へり  
くだって仏の言葉を敬重の思いで聞くこ  
と。これが非常に大切に思ひます。自分  
がどうこう思う思いはいったんそばに置  
いて、頭を下げて仏語を尊く聞くのです。  
「如来の智慧海は、深広にして涯底なし。  
一乗の測るところにあらず。唯仏のみ独  
り明らかに了りたまえり」  
(大無量寿経下巻)

(如来の智慧の大海は、とても深く広く  
果てしなく、声聞や菩薩でさえも思いは  
かることはできない。ただ仏だけがお知  
りになることができる)  
といわれるように如来の智慧の深きこと  
は聖者もよく推しはかることができませ  
ん。であればどうして愚かな凡夫が自分  
の考えで推しはかりえましようか。

そこで、「私がどう思うかより、仏はど  
う思われているか」「私はどう考えるかよ  
りも、仏はどういうお考えか」「私が自分  
をどう思うかよりも、仏は私をどう思い  
たもうか」をよく聞くのです。

「われ賢し」の傲慢心の頭が叩かれて、  
「私はまったく愚か者。どうぞお聞かせ  
下さい」と頭をたれて、仰せを尊重の思  
いで聞くとところに法は入ってくださるの  
です。

最後に、仏語に対して自己主張する僞  
慢心が砕かれ、仏の仰せをそのままに受  
け入れることは、人間にとつてはなはだ  
難しいものです。「難の中の難、これにす  
ぎたるはなし」と正信偈に仰せられると  
おりです。しかし、(難を難)と本当に身  
にしみて知らされれば、それが己の知性  
の計らいを離れるご縁になるのは不思議  
なことです。(了)

# 仏陀の言葉

**\*ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出される。もしも汚れた心で話したり行ったりするならば、苦しみはその人につき従う。――車をひく牛の足跡に車輪がついて行くように。**

ダンマパダー――

私たちは「こんな私にだけがあった」「こんな人生にだけがあった」とつぶやく。しかし、それはだれでもない「私の心」ではなからうか。何を求め、何を願って生きてきたか。どういう心で物事に対処してきたか。どういう心で人にかかわってきたか。その心が私の人生を作ってきたのではなからうか。

いつまでも孤独な生活しかできないなら、それは環境のせいもある。例えば子供がなかったか、夫が早くなくなつたとか、親戚が少ないとか、そういう原因があることはいない。しかし、孤独な身になるのは、私の心が自分を孤独にしていったのではなからうか。

「病気のため一生は不幸だった」というが、病気をただ不幸としか受け取れない己の心の貧しきがあるのではないか。

人間関係でトラブルを起こしやすい人は、自分の周りに「良い人」に恵まれなかったからということもウソではなからう。しかし、何かにつけ人間関係でトラブルを起こしてしまう己の心がそこにあるのではないか。

「私の人生は自分の心が作り出す」というブツダの言葉は、今日の人には受け入れがたい言葉かも知れない。しかし、自分の人生を深く省みたとき、イヤとは言えない真実性がある。

**\*ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出される。もしも清らかな心で話したり行ったりするならば、福楽はその人につき従う。――影がそのからだから離れないように。**

ダンマパダー――

先ほどの汚れた心とは煩惱のことであろう。煩惱を主として、煩惱から人にまじわり、むさぼりや怒りの煩惱によって行動するならば、本人に苦しみはつきまとう。しかし、清らかな心で人生生活を送るなら、その人に幸せは求めなくてもやってくる。

その清らかな心は私の自我心の中に見いだしがたい。如来よりたまわる清浄な信心（仏心）をいただくことによつて可能なのではなからうか。

清らかな心とは純粹感情といつてもよい。何かにつけて有り難さを感じる心であり、その心はその人自身を幸せにする。

.....

**\*「われらは、ここにあって死ぬはずのものである」と覚悟をしよう。――このことわりを他の（愚かな）人々は知っていない。しかし、このことわりを知る人々があれば、争いはしなくなる。**

ダンマパダー一六

私たちは永久にこの世にとどまらない、しばらくしてこの世を去ってゆく旅人である。この世の財産も名誉も、しばらくの間の持ち物、やがてすべてを捨て去って行かねばならない。この世の人生は「しばしの間に過ぎない」という道理が腹にはいつている人は、この世の持ち物の多寡や損得あるいは名誉にあまりこだわることでもないであろう。

しかるにわれらはなかなかそうは思えない。何かいつまでもこの世に生きていくかのごとく思い、そのような思いで生活をしている。そのために些細なことやわずかな利害で争うてしまう。

阿弥陀仏が「汝は、この世に留まるのでもなければ、死んで暗やみに消えゆくものでもない、我が浄土に生まれるのだよ」との仰せは有難く、またこの世の利害へのこだわりを和らげてくださる。

.....

**\*すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身をひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。**

ダンマパダー〇一三九

**\*すべての者は暴力におびえ、すべての生きものにとつて生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。**

ダンマパダー〇一三〇

先日の朝日新聞の「天声人語」に、A高校の全校集会で、ある生徒が先生方に、「なぜ人を殺してはいけないのか」というシビアな質問をした。けれどもどの先生からも答えが返ってこなかったとい

う記事が載っていた。

これらのブツダの言葉は、時代と人をこえて、なぜ人に暴力をふるい、又、人を殺害してはならないかについて、平明でしかもよく納得のできる内容だと思ふ。人は誰でも暴力を受けることは辛いことであり、殺されることを恐れている。それは、自分にとって自分のいのちほど愛しいものはないし、他者にとつても同様に己のいのちほど愛しいものはない。自分が暴力をふるわれたり、殺されたりする時、あるいはそれを予期する時の大きな苦しみや不安は他者にとつても同じである。自分の身にひきくらべて、人も同じように辛いことだと思つて、人を殺すことはもちろん暴力を行使してはならない、といわれている。これは個人の間でも集団（戦争）でも同じことである。

(了)

## 〈位職つれづれ日誌〉

\*六月四〜七日。福井別院へ。これで三度目である。福井別院は工事中。だからかも知れないが院内は埃が多く、掃除もされていなかった。広い院内だから掃除がなかなか出来ないであろう。若い頃八尾別院に勤務した時のことを思い出す。勤めている者同士がお互いに牽制してあって、なかなか掃除をしなかったものである。

\*六月九日から十一日。同朋会館へ。担当は北海道教区の推進員教習。真宗を知りたいという熱意の強い人が多く、こちらも力が入る。会館で時々「こここの研修では答えを出さない」と聞くが、真宗に答えがないのだろうか。答えがなければ哲学や思想に過ぎない。「本願を信じ念仏を申さば仏になる」これは答えではないのか。

\*六月二十日。久しぶりに墓掃除に行く。

\*六月二十二日。同朋の会。御一代記聞書を学ぶ。